

「声の表現」 ～アナウンス・朗読・読み聞かせ～

よりよい音読・朗読をめざして

渡 辺 康 英

1. はじめに

授業において教科書の本文を音読させることはよくある。しかし上手に読める生徒は多くはない。朗読風にとはいわないまでも、あまりに平板な読み方をされると音読させる意味が減少してしまう。日頃耳にしている元気な声が音読のときにも聞けないものだろうか。どのように声をかければ読み方が変わってくるのだろうか。この発想のもと、総合的な学習の時間に「声の表現」という選択授業を置き、国語の授業の中にどう生かすことができるかを探ることにした。

放送委員や放送部の生徒相手なら1対1の指導により短期間でもある程度までは読みの技術を向上させることができる。1対多数の授業形態のなかでどのような導きができるのだろうか。授業時に声を出して「読む」練習をさせるとして、「各自声を出して読んでみよう」でも音読することでそれなりの効果はあるが、一人で声を出して読んでみることと教室で読み上げることは根本的に違う面を持つ。その差異を生徒に理解してもらわなければならない。具体的にどのような指示を出せばよいのか、どのような指示では効果が少ないのか、考えてみた。放送部顧問としてアナウンス・朗読の指導をながらくし、NHKの放送コンクールの地区予選の審査員もしたことはあるが、授業とは別物と思っていた。1対多の音声表現指導についてのノウハウは持ち合わせていない。次回は何を試してみようかと考え込むことの多い授業であった。

2. 授業計画概要

高等学校1学年対象 総合的な学習の時間「声の表現」1単位

[選択科目の募集時の案内]

- * 声による表現を考え、豊かな表現力を身につける。
- * 人とのコミュニケーション手段としての声について考え、表現力を身につけよう。自分の声を知ること、自分自身を知ることにつながる。
- 1学期：自分の声への気づき。(アナウンス・朗読)
- 2学期：発声による表現・表情の変化(紙芝居・絵本・読み聞かせ)
- 3学期：効果的な声の表現(ラジオドラマ・プレゼンテーション)

1学年女子8名が選択。受講理由については「話すのが下手だから」「発表などが苦手だから」という人前で話すことが不得手だという生徒が多く、声に出して読むことが好きで「朗読が上手になりたい」という生徒は1名であった。下手、苦手の克服を目標にすえ授業を展開することにした。声を出してみるとという実践中心の授業なので8名という人数は適当であった。

グループ学習をイメージしており、グループ5～6名で2グループ成立するとよいと考えていたが、8名では2グループはできない。1グループ扱いで進めることにした。実技中心の授業で毎時何かしら読んでもらう。順繰りに読む、感想を述べあう、指導者がコメントする、が基本パターンになる。指導者として、こういうものです・こうすると良い、というコメントはできるだけ避けるようにした。自分たちで、こうすれば良い、という気づきを求めるようにした。

計画段階では、二つのゴールを考えていた。一つは放送劇の制作(録音)。台本の読み方しだいで、いかに印象が変わるかを体感させ、表現の仕方を考えさせる。もう一つは発表学習などでのプレゼンテーション。効果的な発表とはどのようなものか、考えさせる。しかし、実際にはなかなかそのゴールには近づけなかった。

3. 具体的な実践から

A 自分の声を見る [パソコンで周波数特性を見る。自分の声の特質を知る。]

自分の声を知るといって、まず録音して聞いてみればよい。生徒は録音で聞いた声に変に聞こえるということも体験的に知っている。骨伝導をともない鼓膜に至る自分の声と、骨伝導成分をとまわらない声との違いによるものだが、録音を聞いた生徒は自分の声が「変な声」なのではないかと不安になるようだ。“他人の聞いている声は録音のような声だが、変な声ではないんだ”と安心させておきたい。ヘッドホンを用意し、録音機材のモニタ音の音量を少し上げて自分の声を聞かせてみるのもおもしろい。骨伝導成分もあるのだが、モニタ音を上げることでリアルタイムに他人が聞いている自分の声を確かめることができる。

自分の声を目で見えるようにするとどうなるか、スペクトラムアナライザを用意して生徒に体験してもらった。リアルタイムスペクトラムアナライザは音の周波数成分を波形グラフ化してくれるもので、授業ではフリーソフトウェアのWaveSpectra for Windows Ver.1.31 (efu氏制作)を用いた。マイクを通して声を出すとリアルタイムに周波数成分を見せてくれる。およそ500～1 kHz前後にいくつかの山が見られ、声の高さの中心と倍音成分を確認することができる。生徒からは「どのような波形がいい声なのか」という質問があがったが、波形と「いい声」の相関はあまりない。細かな山のギザギザが少ない方がいわゆる澄んだ声という程度である。

スペアナは、生徒にとっては自分の声の波形を見る珍しい体験の楽しさであるが、指導者の意図は声を出させることにある。声を出さなければ波形は見られない。あらかじめ入力レベルを低めに設定しておき、少し大きな声を出さないと波形が十分に見えないように設定しておいたのである。思い通りに大

きめの声を出してくれた。生徒には音読の時などに大きめの声を出すことへの照れがあることが少なくないが、この授業の導入として、大きな声を出すことへの抵抗感を取り除く効果は高かったと思う。

B アナウンサーになろう [ニュース原稿、天気予報を読む]

アナウンスは情感をこめる必要がなく、朗読に比べれば考える部分が少ない。資料は省略するが、いくつかのニュース原稿と天気予報（1分間程度のもの）を用意し、全員下読みをさせた後、「アナウンサーになったつもりで読んでみてください」と指示した。すわったままで一原稿ずつ読んでもらい、そのうえで上手なアナウンスはどのようなものかを考えさせた。技術的な指導はまだ何もしていないが、生徒はそれぞれ工夫して読んでいた。

>原稿を顔の正面に持つ。早口に一気に読み上げる。声の大きさ：中。文末消えていく読み方。

>原稿は机の上。下を向いた状態。声、小さく感じられる。文末をはっきり読もうとする。

>原稿は両手で持ち机の上に置く。背筋のばす。声、適度。はじめゆっくり後半やや早口に。

>緊張気味。やや甲高い声調。つかえ多い。声は大きめ。ややゆっくりな読み。

総じて早い。1分間程度が適切な原稿を30秒から50秒ほどで読んでしまう。順番の途中で「ゆっくりと読んでみてください」と指示を加えたが、その後も1分を越えて読む生徒はなかった。緊張すると読みが早くなる。緊張感が強すぎるとよい読み方にはならない。「リラックスして読みましょう」という指示は避けたい。あらたまって読むのであるから軽い緊張感が必要である。リラックスしてだらしない読み方をされても困る。

“はっきり”読もうとする意識が多くみられた。“はっきり”した読み方はアナウンスだけでなく重要なことだが、文末まではっきり読むのは不自然なものとなる。「～双方の主張を聞く口頭弁論を開きました。」文末には自然な音量の下降がある方が普通であり、「ました」「です」の「tA」「sU」は軽く発音されていれば十分だ。いわゆる文節ごとの「への字」音調でよい。「文末まで“はっきり”しすぎると不自然になる」と不自然な読み方の例をしてみせ、「はっきりの意識は文頭の方」と説明。文頭を例に「への字」音調を説明、「あおもりけんの～」「そのなかでも～」「このきくらは～」を例示する。文末のイントネーションは自然下降でよいが、消え入ってしまわないようにする加減は多少練習が要る。

「はっきり読みましょう」という指示はむしろ声を大きく出させる効果がある。

多くの生徒が気づいていなかったことがある。どこを強調して読まなければいけないのかという（プロミネンス）ことである。ニュースであれば、いつ、どこで、だれが、という要素は確実に伝えなければならない要素である。「強く意識して読むべきところを下読みの際に傍線をつけるなどマークしておく」ように前もって指示したい。

C 朗読してみよう [詩の朗読、子ども向けの絵本を読む]

(いろいろな読み方～声の高さを変えて 読む速さを変えて 間を変えて)

初見で詩の朗読をさせた。みな「難しい」と言う。なぜ、と問うと、作者の伝えたいことが理解できていないと感情を込めることができない、強調すべきところがわからない、などの反応であった。その通りであり、朗読ということになると内容の理解が必須になる。初見ではただの音読はできても朗読はできない。授業で扱ったことのある詩を読んでもらうとそれなりの朗読になる。詩の中のヤマ場がわかっているためだ。「わかっていないとうまく読めない」ことを実感してもらうための設定である。

声に出して読むときには、句点の後のわずかな間に次の文節・分の下読みがされている必要がある。次の文をどのように読むかの準備をするのだが、詩はおよそ全容が目に入り、次の行がつかみやすく、先読みの必要性を確認するのによい。「マルのあとの間で次の文の準備をする」のは当たり前のことだが、読むのが下手な生徒は先読みの距離が短いことが多い。自分が範読するときとは考えると次の文は先読みし、1、2行先まで目に入れている。「次の文を先読みして理解してから声にするんだよ」というと思いのほか感心した顔で聞いている。だれでも当たり前に行っていることなのだが意識するとしないとは先読みの距離が違うようだ。

次に幼児向けの絵本「あかずきん」を読んでもらった。ひらがなばかり、分かち書きが読みづらいという声もあったが、先読みはしやすい。筋を知っているうえにページ全体を先読みできる。絵本読みはナレーションの基礎と人物の演じ分けを確認する材料である。淡々と読む部分、盛り上げていく部分はどこか、登場人物の台詞の雰囲気はどうするのか、と課題は少なくない。

特に指示なしで読んでもらうと、みな明るく楽しげな雰囲気で地の文を読んでいた。台詞では個性が表れ、声色で演じ分ける生徒、声の調子で演じ分ける生徒、台詞の速さを工夫する生徒とさまざまであった。「あかずきん」では女の子・おかあさん・オオカミ・おばあさん・狩人の5役、ナレーションを含めると6役となる。女の子は少し高めの声で、ちょっと舌足らずに。おかあさんは優しげな声で、オオカミはやや太い声で、というふうにはほぼ雰囲気は共通であった。声を変えようとする意識が強くみられた。

声色は変えてみるのもいいが、声優のように演じ分けられるものではない。声色の変化を上手につけた生徒の読みるとき感心する声があがったが、声色の変化をつけられればいいというものではない。どなたであったかは忘れたが、ベテランの囃家さんが「人物を声色で演じ分けているうちはダメです。声色では5人が10人となると使い分けられなくなります。多少の声の高低と台詞回しで演じるんです」と言ってらした。

狩人の台詞を例にし、「太い声にして演じて男性の声とはちがうね。でもちゃんと男の狩人の雰囲気は出ていたね。台詞の言い方が男の人らしくできていたからだよ。私がたとえ裏声を使っても女の子の声はでない。声の質の変化ではなく、らしい雰囲気 of 台詞回しをすればよい」と解説。そこで、いろいろな読み方をためしてもらった。声の高さを変えてみる・読む速さを変えてみる・間を変えてみる。あわせて明るい声、暗い声と効果を説明した。読む目的と場についてもふれた。幼稚園などで集団を相手に読む。1対1で読み聞かせる。夜寝かしつけ前の読み聞かせ。それぞれ読み方が違ってくるはず

だ。

この時点でアナウンスと朗読の違いはどこにあるか、生徒に考えさせた。

- ・アナウンス：適宜間を取る。重要な言葉を強調する。ペースを変えず読む。はっきりと読む。あまり感情を込めずに読む。
 - ・朗読：声に表情をつける。場面によって読む速さを変える。声の強弱を考える。間の開け方を工夫する。声の高低を工夫する。声の調子を工夫する。文章の雰囲気を出す。ナレーションと台詞と区別がつくようにする。感情を込めて読む。
- 思っていた以上にアナウンス・朗読に必要なことをとらえてくれていた。

D いい声を出すためには [読む姿勢、発声、呼吸、適度な大きさ]

ガ行の濁音・鼻濁音について、アクセントについてなどをこの時点で説明した。アナウンス、朗読の体験の後の方が取り組みやすいと考えてのことである。感じのよい読みをするために意識したいことをいくつか説明した。姿勢、腹式呼吸などについては記事も多いので報告を省く。

声の大きさと距離感についての解説をした。本を読み上げたり発表をしたりするときには距離意識が求められる。どこまで声を届かせる必要があるのかである。グラウンドの向こう側へ呼びかける声、隣の子と話をする声を例とし、声の大きさは距離感で変わることを説明。教室で部屋いっぱいにかせるための声の大きさはどのくらいあればいいのかを体感させた。だれかに音量を変えて音読してもらい誰までちゃんと聞こえているか手を挙げさせて確かめるのもおもしろいかもしれない。国語の授業でも「音読するときには教室のすみの子のところまでしっかりと聞こえるように意識しよう」と指示をしておくかどうかで生徒の声の大きさはかなり違う。

本の持ち方についても言及した。立って読む場合、本は体の正面をはずして持ち、声を本にぶつけなようにするのがよい。座って読む場合は首を前に倒さず、声が本の情報を通過するように読むほうが響きがよい。下を向き本に声をぶつけてしまうのは損な読み方だ。

(ちなみに、アナウンスでは実は大きな声は必要ない。むしろ普通の声よりもやや抑えたくらいの声でよい。アナウンスの場にはマイクロホンがあり拡声されるのが原則なのだから。アナウンス練習の時点ではこのことには触れずにおいた。マイクを前にする場合は別の注意が必要になる。校内の連絡放送でよく聞かれるが、息や鼻息を吹きかけてはいけない。アナウンス用のマイクには正対せず、息の向かう方向をかわすように位置させる。手持ちなら口よりやや下に構える。机上マイクなら口正面から45度ななめにセッティングする。マイクにべったり口をくっつけるようにするのはカラオケ用のマイクだけである)

E アフレコのまねごと [声抜き、BGMとSEだけのアニメを利用]

遊びの要素が強いが、アニメのアフレコはやってみたいものらしい。しかし訓練なしに画面に台詞を

音響効果なし、照明効果なし、BGM使わず、台本を持った状態で体を使った演技はしない、とないづくしで演じることになり、通し稽古は3回程度で夏期休業をはさみ迎えた文化祭で2回の公演をおこなった。結果、朗読劇としては、あまり感心できるものではなかったというのが指導者としての正直な感想だった。

会場の問題：体育館の食品販売の模擬店が活動している中での舞台であったこと。雑音の多い中で十分に集中できなかった。緊張感もあったろうが、大きな声を出さなくてはという意識ばかりが強くなり、読み方（演技）への配慮ができなくなった。

音響の問題：教室での練習と体育館の舞台との違い。生徒たちは拡声なしでやりたい、ということだったのだが、やはり体育館という場で十分な声を響かせるにはいたらず、また生徒個々の声量の差が大きく、教室との違いを知るようになった。2回目はマイクロホンを用意したが、これもマイクを使う練習をしていなかったために、立ち位置・マイクロホンと向き合う距離・マイクに対する声量がまちまちで音響バランスの悪い結果になった。

やはり、舞台上で発表するには舞台上で練習しなければならない。マイクを使うならマイクを使った練習をしなければいけない。当然のことが指導者の反省として残った。生徒たちも事後、ビデオを見たくない、見る必要もないということであった。感想としては、気持ちよかった、という声もあったが、主なものは、

> 教室と体育館の違いが大きかった。声が出なかった。

> 自分が何を言っているのかよく分からなかった。

> (マイク使用時) 壁から跳ね返る自分の声が気持ち悪かった。

であった。声の大きさの差による全体のバランスの悪さに気づいた生徒はいなかった。教室では相手の声はよく聞こえており、声量を調節するのも難しくはなかった。舞台ならではの落とし穴である。また、マイク使用時は、よりゆっくり読む傾向が見られたが、これは跳ね返りの音を聞いてしまうために起きる現象である。生の舞台を短時間で作るのはやはり難しい。

G 放送劇の制作

次は放送劇を作りたい、と生徒たちは意欲を見せた。翌年度のNHK放送コンクールに応募しようか、という話になったが、これはある程度進めてみたものの頓挫した。コンクールの放送劇部門は、シナリオがオリジナルでなければならないという規定があり、既成の作品の脚色では参加できない。オリジナルができない、という時点であきらめることになった。コンクールに出品しないまでも脚本作りも体験してほしかった。同音異義語に気をつけるなど台詞にむく表現、むかない表現も扱いたかったが、台本作成は当初計画にもないことなので別の機会にまわすことにした。

舞台を終えて、もっと「うまく」になりたい！という声も増した。「うまく」なるためにはどんな練習をするのがよいのか。この授業を越えて芝居の領域に入りそうである。劇団などのノウハウでも持ち込

まないと対応できそうにない。

H 難易度の高い素材を読む。

これまでは平易な文章を持つ素材を利用してきた。さっと読んで内容理解ができ、読み方（表現の仕方）に重点をおけるようにと考えたからである。素材の難易度を上げるのもどの程度がよいのかわからない部分は多いが、「読む」のに難しいものと「語る」のに難しいものを用意した。

- ・清水義範『日本語必笑講座』地の文がやわらかく、半ば語り口調である上に、台詞の引用が多数あり、地の文と台詞との読み分けが難しい。
- ・落語 江戸言葉がまず難しい。それを除いても昔の人物の描き分けは容易ではない。テンポ、間が難しい。『小言幸兵衛』『愛宕山』

ちょっと下読みをすれば読めるようになるというものではない素材を用意してみた。落語などはテープ起こしされたものであってもその通り読めば同じように語れるわけではなく、読んでもらうには意地が悪かったかも知れない。表現するのは「難しい」という実感も持ってほしかった。素材としたのは抜粋的なものだったが、落語などは案の定「難しい」と言うばかりでお手上げだった。

生徒は落語という話芸をほとんど知らなかったので、1時間割いて、桂米朝師の上方落語『千両みかん』を録音で聞かせた。これは文字で読んでもおもしろみをあまり感じない作品だが、話術一つでここまでおもしろくなる、という好例だと思う。感想を聞くと、「おもしろかった」に加えて、「どうしてこうおもしろく感じられるのかわからなかった」ともあった。

なぜ惹きつけられるのかは結局考えることができなかった。ベテランの芸だから、に落ち着いてしまう。たしかにこれは無理な問いかけだった。私も若手の噺家の芸とベテランの芸のどこが違うか説明することはできない。芸の深みが違う、と説明にならないことを言うしかない。

難易度の高い素材は与えない方がよいのかもしれない。難しさばかり感じ、向上心がとまってしまおう。今後適度に難しいものを探し求めなくてはならない。

1 演出をする [昔話 3学期]

本来の目的であった「効果的な表現」というところに立ち返って、仕上げに「昔話」に挑戦させた。2人一組で一人が読み、もう一人が演出をする。という形態をとる。自分で考える演出は抑えて、他の人の演出を受けることで気づくことがある。また演出する側も語り手の表現を演出することによって学ぶことがある。よい読み方は一通りではなく、一つの素材でも色々なアプローチができることをあらためて感じてもらえたと思う。

4. 今後の課題

「読み」の印象は声の大きさ・高さ・響き、緩急・高低・間などによって大きく左右されるが、理屈で

はなく、いろいろな読み方を実験してみるなかで変化に気づき、そして声で表現することのおもしろさを感じてもらえたようだ。生徒はもう1年継続したいと翌年度の選択授業の開講を要求してきた。おもしろかったからと言ってはいるが、もの足りなかったということも含んでいるように思われる。

「評価」についてはもう少し研究を続けたい。評価の観点をどうおくのか。総合的学習の時間での実践なので具体的な点数化は求められないものの、やはり評価の仕方を整えないではすまない。

評価の観点となりそうな声の表現の要素を列举してみる。

- | | | | | | |
|---|-------|--------|----------|---------|------------------|
| a | 声の大きさ | 小さい | 適当 | 大きい | 場にあった声の大きさ |
| b | 声の高さ | 低い | 適当 | 高い | 重々しすぎたり、甲高かったり |
| c | 口の開き | 小さい | 適当 (大きい) | | ぼそぼそした発音になっていないか |
| d | 声の響き | 悪い | 適当 | よい | 鼻に抜ける響きと口腔内での響き |
| e | 印象 | 暗すぎ | 適当 | 明るすぎ | |
| f | 安定 | 安心できない | | 安心して聞ける | |
| g | 速度 | 遅い | 適当 | 早い | |
| h | 間 | 不適當 | 適当 | | |

そのほかにも、全体に一定の読み方で持続できたか。流暢度。モーラ (拍)。適切なイントネーション。語の際だたせ、プロミネンス。発音、アクセント。それぞれが関わり合っているためすっきりとまとめられないでいる。参考までに、NHKの放送コンテストの審査の視点は次のようである。

(NHK全国高校放送コンテスト要項から抜粋)

1. アナウンス部門

- | | | | |
|-------------|-------------|---------|----------------|
| ア. 原稿 | (ア)素材の選び方 | (イ)文章表現 | (ウ)内容 |
| イ. アナウンスの技術 | (ア)マイクの使い方 | (イ)発声 | (ウ)発音 (エ)アクセント |
| | (オ)イントネーション | (カ)テンポ | (キ)ポーズのとり方 |

2. 朗読部門

- | | | | |
|----------|-------------|---------------|----------------|
| ア. 原稿 | (ア)作品の選定 | (イ)朗読部分の抽出の仕方 | (ウ)内容 |
| イ. 朗読の技術 | (ア)マイクの使い方 | (イ)発声 | (ウ)発音 (エ)アクセント |
| | (オ)イントネーション | (カ)テンポ | (キ)ポーズのとり方 |

それぞれの小項目が10点配分で100点法で評価が行われる。コンテストと授業とでは音読・朗読の観点には差異があるだろう。考えるべき要素が多く、まだ整理ができていない。生徒間の相互評価が可能なかたちに整理し、別の機会に提示できればと思っている。